2016年度　　E

国　　語

注　意

1. 問題は全部で14ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その1)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし，マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. ＨＢの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する記号・番号の ◯ を塗りつぶしなさい。◯で囲んだり╳をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が 1 のとき)

1	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⓪

4. 一度記入したマークを消す場合は，消しゴムでよく消すこと。╳をつけても消したことにならない。
5. 解答用紙をよごしたり折り曲げたりしないこと。

一　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

「ことばの宇宙」という言い方がある。それは私たちが、直接に目で見、耳で聞き、手で触って確認できるものの世界を離れて、ことばがことばだけで一つの世界をなすことをいう。ことばで語られた物語世界を聞き、また読むときに、この比喩がぴたりとはまる。

しかし、もとよりことばは最初から宇宙をなしていたのではあるまい。系統発生的にも個体発生的にも、ことばが最初に降り立つのは、人々がその生身の身体で生きている世界である。身体で生きる膨大な広がりのなかでみたとき、その最初のことばはまだ大海にたらしたほんの一滴の水のようなもの。そこからことばがことばだけで世界を立ち上げるようになるには、ずいぶん長い過程をへなければならなかったはずである。いや、すでにことばの宇宙をそれなりに成り立たせている私たちにおいても、日常的に体験することばの多くは、周囲の世界にはめこまれたかたちではじめて意味を得ているのであって、ことばがそれだけで[a]屹立することは少ない。

「あっ、雪！」幼い息子が叫び声を上げる。その声につられて空を見上げると、綿帽子のような雪片がふわふわと高い空から舞い落ちてきて、その雪の一ひらが頬にあたる。こういう場面を私がじかに体験したとする。息子は、もちろん雪の落ちるその世界を目の前にしてことばを発したのであり、また聞いた私も、自分の身体に感じたこの世界のなかにこれを受けとめたのである。そこでことばが身体の世界に寄り添い、そこに重なる。ことばが発せられたことで、身体だけで生きられたのとは違うもう一つの世界への窓が、ここにわずかであれ開かれたと言ってもよい。しかしもちろん、それだけで宇宙をなすところまでは遠い。

では、こんな場面はどうだろうか。閉めきった障子の内で火バチ(ア)にあたりながら餅を焼いている私の耳に、外から子どものはずんだ声が飛び込んでくる。

あっ、雪！

ここで私は、自分の身体でその雪を直接に感覚してはいない。にもかかわらず、子どもの一声に、私のなかで雪の舞い落ちる

世界が立ち上がる。自分が身体でじかに体験しているのは部屋のなかの光景、そのうえに不意に飛び込んできたことばが、別のもう一つの世界を立ち上げるのである。もちろんそうは言っても、障子一枚をはさんで、私の身体は、子どもの生きる世界にほとんど(イ)リン場しているのであって、これをまだことばの宇宙とまでは言えまい。

しかし、次のような場面を書物で読んだとすればどうだろうか。

庭でコマ回しに興じていた子どもが、不意に「あっ、雪！」と叫んで空を見上げた。大きなぼたん雪が、(ウ)ナマリ色の空からゆらりゆらりと舞い落ちてくる。

ここでも私たちは、しっかりその雪の落ちてくる情景を思い浮かべる。たとえこれを読んでいるのが真夏で、ステテコ一枚で、団扇をバタバタやっていたとしても、その雪の場面を理解するのに不都合はない。ここまできたとき、ことばは現実の場面を離れて、それだけで一つの世界を立ち上げる、そういう力をもつと言える。[b]そこにことばの世界と身体の生きる世界の二重化をはっきり見ることができる。

これは私たちがしじゅう何気なく経験していることであるので、ことあらためて言うほどのことではないと思われるかもしれない。しかしこのごく日常的な二重化の構図こそ、まずは私がここで確認しておきたいことなのである。念押しに、[c]手近で見つけた小さな詩歌からさらに二つ例を引く。

雪がコンコン降る。
人間は
その下で暮らしているのです。

戦後、日本がまだ非常に貧しかったころ、山形県の寒村に暮らした子どもたちの「生活綴り方」の一作品である。しかし、そのことを知らなくとも、これを読む私たちのまえには、一つの光景がある気分をもって広がる。いまこれを読んでいる私の目のまえでは、もちろん雪など降っていないし、家々を厚く真っ白におおった雪景色も見えない。しかしこの三行の文を読んだだけで、そうした世界が眼下に広がる思いがする。たったこれだけの文章が一つの宇宙を語っているとも言える。

あるいはこんな歌がある。

四十代この先生きて何がある風に群れ咲くコスモスの花

この少々虚無的で、悲しい歌は、道浦母都子の作品。彼女はたまたま、私と同じ一九四七年の生まれである。学生時代をほぼ同じ時代状況のなかに生きて、その是非はともあれ「全共闘歌人」と呼ばれてきた。しかしこの作者の生きてきた過程のあれこれを知らずとも、この歌は歌で一つの世界を立ち上げている。

ここでも私たちは、いまコスモスの花群れを見ているわけではないし、それをそよがす風を頬に感じているわけでもない。にもかかわらず不思議なことに、この文字のならびのなかに一つの情景が浮かんでしまうのである。

身体がその生身で直接に生きる世界とは別に、ことばがそれだけで独自に開く世界がある。そのことを人は「ことばの宇宙」と呼んできた。もとよりそれは一つの比喩である。ことばがまったく身体の世界からの支えなしに、それだけで成り立つなどということは、本来ありえない。

身体が生きる世界を離れ、それとの関係の一切を断ってしまったところでは、個々のことば自体が意味をなさない。だいいち、語り出す声は身体から発する息の音であり、書きつけた文字は身体の仕草の痕跡である。この身体を出入りする息、身体の紡ぎ出す仕草ぬきに、ことばはありえない。これはあまりに当り前のことである。

しかしそれだけではない。ことばで語り出す世界の中身そのものが、この生身で生きる世界を離れては、根を失う。雪を肌に受けて震える身体、その下で冷たい冬を過ごす身体をぬきには、[yuki]はただの音声にすぎないし、「雪」の文字は意味不明の模様にすぎない。あるいは風の音を聞き、それが頬に触れる感触をもつ身体を離れては、[kaze]はただの無意味な音声以外のものではなく、「かぜ」はただの無意味な綴りでしかない。ことばはすべて、どこかで身体の世界に根ざしている。これもまた自明の理である。

にもかかわらず、「ことばの宇宙」という言い方は単なる比喩を越えた側面をもつ。なにしろ身体の世界は、その身体のいる〈ここのいま〉にシバられ、その身体の位置を基点とする遠近法をまぬがれることができない。

ところがことばが立ち上げる世界のなかでは、知らないうちに〈ここのいま〉の自分の身体の位置を抜け出し、視点を移動させて、そのことばの世界のなかに身を移してしまっている。たとえば小説を読みふけるとき、読んでいる自分がその世界のなかに移り住んでいるかのように錯覚する。そうした錯覚のうえで人はことばの宇宙を楽しみ、またそこに巻き込まれて苦悩する。このことは別に文章のうまい下手にかかわらない。いかにたどたどしくともことばはことばである。ことばは身体に根ざし、それでいて身体を越えるもの。そうした両義を本性とする。

雪とか風はこの身体で体験できる。ところがこの身体で体験できないものでさえも、人はこれをことばにして語り、しかもそれが雪や風に勝るとも劣らぬ現実感を帯びる。たとえば、人は自分が死ぬということを考える。もちろん考えようが考えまいが、生き物としての人間はかならず死ぬ。ならば死ぬことを考えていったい何になるのかわからない。わからないけれども、それでも考えてしまう。 Z 考えてはやたら怯え、不安にかられるのだから、たちが悪い。

ほんとうを言えば、身体の世界に則してみる限り、e人は自分の死を体験できない。人は死に怯える。正確に言えば「死」の観念に怯える。そしてこの観念が人間の生きる形をどれだけ左右してきたであろうか。言葉は身体で生きる時空世界を超えて、もう一つの世界を立ち上げる。

（浜田寿美男『「私」とは何か』による）

問一　傍線部a「屹立する」の最適な説明を、次の①～⑤のうちから選び、記号をマークせよ。解答欄は 1 。

① ことばがまったく動かずに、いつまでも同じ場所にじっと立っていること。
② ことばが周囲の世界に依拠することなく、ことばだけの力で立ち上がっていること。
③ ことばが宇宙に受け入れられずに、さびしくてひとり悲しんでいるということ。
④ ことばが優越感を持って、まわりの世界をひとりで見下ろしているということ。
⑤ ことばがひとり歩きをしているうちに、どこかへ行ってしまうということ。

問二　二重傍線部(ア)～(エ)のカタカナ部分に用いられる漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のなかから、それぞれ一つずつ選び、記号をマークせよ。解答欄は順に 2 ～ 5 。

(ア)　火バチ　　2

① 悪事をするとバチが当たる
② 蜜バチがたくさん飛んでいる
③ ハチ植えの花が咲いた
④ 伊豆のハチ丈島を訪れる
⑤ 三味線のバチ捌きがみごとだ

(イ)　リン場　　3

① 人リンにもとる
② 高層ビルがリン立する
③ 大リンの花を咲かせる
④ リン機応変に対応する
⑤ 近リンの諸国

(ウ)　ナマリ色　　4

① エン故を頼って上京する
② 雨天により順エンとなる
③ 高エンな理想を追い求める
④ レストランでエン会を開く
⑤ 亜エンの含有量を調べる

① 真相をバク露する
② 景気回復の起バク剤となる
③ 犯人を捕バクする
④ バク然とした印象をもつ
⑤ 彼の意見に反バクする

（エ） シバられ

5

問三 傍線部b「そこにことばの世界と身体の生きる世界の二重化をはっきり見ることができる」とあるが、それはどういうことか。説明として最適なものを、次の①～⑤のなかから選び、記号をマークせよ。解答欄は 6 。

① 他者の身体が体験している現実の情景が、他者の発したことばを通じて、自己の身体によって無意識のうちに忠実に再現されて、両者の深い交流が生まれること。

② ことばがことばだけで独立した世界を生成し、私たちの身体が実際に生きている現在とはまた別に、私たちがその世界をありありと感じ取ることができること。

③ 息子の発した「あっ、雪！」ということばが、それを聞く私の身体に降り立つことで、ことばがことばだけで立ち上げた世界が、身体との対話性を持ち始めること。

④ ことばによって喚（よ）び起こされる想像の世界と、私たちの身体が現実に向かい合っている現在の場面とが、一致して完全に重なり合うように感じられること。

⑤ 息子の発する「あっ、雪！」という声に「雪」を実感することで、その場に居合わせながら気づいていなかった世界が、生き生きと立ち上がってくること。

問四　傍線部 c「手近で見つけた小さな詩歌からさらに二つ例を引く」とあるが、二つの例のどちらかについて、引用者の考え方に即して説明するとどうなるか。最適な説明を次の①～⑤のうちから一つ選び、記号をマークせよ。解答欄は 7 。

① 「雪がコンコン降る。……」の詩は、雪景色を知らない読者にも、雪国に生まれた人間が感じるのと同じ雪の冷たさや白さを追体験させ、雪国の生活とそこに生きる人々に対する共感を生む。

② 「雪がコンコン降る。……」の詩は、読者が現在どのような環境にあるかにかかわらず、降り積もる雪の下の家々で、一人一人の人間が生きているのだ、ということを読者の眼前にありありと描き出す。

③ 「雪がコンコン降る。……」の詩は、果てしなく降り続く雪のもとでの人々の生活を想像させるとともに、読者がかつて目にした雪国の情景を忠実によみがえらせ、二相的な世界をつくり出す。

④ 「四十代この先生きて何がある……」の短歌は、四十代の人間にしか感じられないような虚無感を、同世代の読者に対してのみ雄弁に訴えかけており、同世代の読者の共感を生む。

⑤ 「四十代この先生きて何がある……」の短歌は、読者が作者の年齢や人生に対する思いを深く共有したときに、初めて、秋の風に吹かれる美しいコスモスの群れの寂寥を感じさせる。

問五　次の二つの問に答えよ。**問五は解答用紙（その2）を使用。**

（1）二重傍線部X「紡ぎ」の漢字「紡」の読みをひらがなで正確に記せ。

（2）「紡」の本来の意味は、繭や綿などから「せんい」を引き出して糸を作ることである。この「せんい」の「い」の部分を漢字で正確に記せ。

問六　傍線部d「ことばはすべて、どこかで身体の世界に根ざしている」とあるが、それはどういうことか。その説明として最適なものを、次の①～⑤のうちから選んで記号をマークせよ。解答欄は 8 。

① 「ことばの宇宙」は、身体から独立して成り立った独自の世界であるが、個々のことばが最初に降り立つのが身体の世界である以上、身体から完全に切り離されて存在することはできない。

② ことばが身体を出入りする息、身体の生み出す仕草によって表現されるものである以上、それらをぬきにして生み出された「ことばの宇宙」は、ただの音声と記号からなる抽象的なものにすぎない。

③ ことばが身体の世界を離れることで立ち上げられた「ことばの宇宙」は、われわれを生き生きとした空想の世界に巻き込むが、そのような世界は錯覚であり、実体を持つことができない。

④ 「ことばの宇宙」は、現実とは別に独自に形成された世界であるが、ことばそのものは、あくまで直接的な身体の世界にはめこまれる形でしか意味を持ちえず、機能することもありえない。

⑤ 「雪」ということばが、雪の冷たさを体験したことのない人間には実感できないように、「ことばの宇宙」も、生身の身体に支えられたものであり、直接体験がなければまったく成立しない。

問七　空欄 Z に入ることばとして最適なものを、次の①～⑤のうちから選んで記号をマークせよ。解答欄は 9 。

① おまけに　② さっぱりと　③ 意外にも　④ にこにこと　⑤ ひょうひょうと

問八　傍線部 e「人は自分の死を体験できない」とあるがなぜか。その説明として最適なものを、次の①～⑤のうちから選んで記号をマークせよ。解答欄は 10 。

① 死というものは、もともと生の中にあり、哲学的に考えてみると、生と死はあらゆる意味において同一であるということができるから。

② 人間にとって、死は、いつか自分を襲う現実として意識からは簡単に去ってくれるものではなく、いつもそこにあるものであるから。

③ 母の胎内にいるときには、赤ん坊の自分にはまだ、自分の誕生を経験として受け止めるだけの「私」がまだ成立していないといえるから。

④ われわれはいつも観念の上で、自分の誕生を始点とし、生身の終着点として自分の死をいつも重ねてみるという習性を持ってしまったから。

⑤ 私が死ぬとき、その死を体験するはずの私自身も死ぬのであるから、原理的に言って自分の死を体験することは不可能であるから。

問九　本文の内容と合致する説明として、最適なものを次の①～⑤のうちから選んで記号をマークせよ。解答欄は 11 。

① 「ことばの宇宙」は、視覚や聴覚や触覚によって確かめることができる生活世界と対話的にかかわりあいながら成立しており、「ここのいま」において即座に独自の世界を立ち上げている。

② 小説を読むということの一面は、作中人物と同化し、その苦悩や喜びを生きることであるが、私たちの想像力には限界があるので、読者としての経験は錯覚のうえに成り立つものでしかない。

③ 読書という行為において、私たちが現実の日常を忘れ、本の中の主人公になったかのような錯覚を覚えるのは、ことばの世界と身体の生きる世界とが、対話をする形で重なりあっているからである。

④ ことばの両義的な性格は、身体の世界が身体を基点とする遠近法をまぬがれないのに対して、ことばが身体に根ざしながら、身体を越えてことばの世界へ移行し、独自の世界を立ち上げるところに見られる。

⑤ ことばを人間の生活に即してとらえず、語や文法という面からのみ考えようとすることば観の限界を克服するために、物語世界を立ち上げ、そこで「ことばの宇宙」の比喩的な働きを活用しなければならない。

二　次の文章は、大坂城落城の折、城から脱出した女中が、後年回想して語ったものである。これを読んで、後の問に答えよ。

女中方、出でられ申さず候ふやうに、栄翁申し候へども、それにもかまひ申さず出で申し候ふ。その辺に、金の瓢箪の御馬じるし、いかがして落としおきけむ、これあるを、御手長のもの、「おあちや」と申すといま一人して見て、「捨て置きては御恥辱をあらはすなり」とて、取りてうちめげて捨てける。

それをも捨てて、やうやう城外へ出で申し候ふところに、竹束これあり候へども、武者もをり申さず、また城中城外等にも、見えがかりには手おひ等も見え申さず候ふ。しかる時、竹束の陰より、一重もの一つ着たるもの、錆び刀を抜き持ちて来たり。「金にてもあらば、出だせよ」といふにより、懐中に竹流し二本持ちてありしを、出だしつかはす。さて、そのものに申すは、「藤堂殿御陣はいづかたぞ」と問へば、「松原口」と答へけるゆゑ、「そのところへ連れ行き候はば、またまた金取らせる間、連れ行きくれよ」と頼む。

いざこの方へと同道いたし、参るうちに、要光院殿、侍に負はれたまひ、あとより御足を押さへて御退き候ふ。そのほか、女中・侍もつきをり申し候ふを見つけ、すなはちそこへ駆け寄り、それより御供申し、森口のある在家へ御立ちより候ふところ、菰筵を敷き、たたみ二畳、古きを取り出だして、要光院殿をばその上に置き申し候ふ。

いづれもその筵にをり申し候ふ。その時、いづ方より来たりしやらむ、行器に強飯盛り候ふを、みなみな紙に載せ、食べ申し候ふ。その御供の女中のうちに、秀頼公御召し使ひの女中、これはただ帷子ひとつに下帯一つしてをられ候ふゆゑ、それにては難儀なるべしとて、わが帷子を一つ脱ぎ、下帯も一つ解きて、その女中に参らせける。

さて、要光院殿には、家康公へ御召しにつき、御出で候ふ御迎へに、御乗り物など参る。

その時、女中へ仰せられ候ふは、「もし、将軍様仰せありて、いづれも女のことなれども、城中に居り申したるもの、いかやうに仰せつけらるべきも知れず候へば、随分よろしく申すべく候へども、とかく御下知はそむかれず、覚悟し給へ」と、要光院殿仰せられければ、その時、みな泣き悲しむことおびただし。

（『おきく物語』による）

［注］

＊栄翁…武田栄翁。豊臣方の武将。

＊金の瓢箪の御馬じるし…豊臣家の旗印。

＊手長のもの…膳部を運ぶ役。

＊竹束…竹を組み合わせて作った垣。

＊手おひ…負傷者。

＊竹流し…割竹型の鋳型に流して固めた金の延べ板。

＊藤堂殿…藤堂高虎。徳川方の武将。

＊要光院殿…豊臣秀吉の妻淀殿の妹。常高院とも。

＊森口…現在の大阪府守口市。

＊行器…食物などを入れるうつわ。

＊秀頼公…豊臣秀頼。秀吉の子で、大坂城の主。

＊家康公…徳川家康。後の「将軍様」も同じ。城攻めの総大将。

問一　傍線部1「いま一人して見て」の解釈として最適なものを次の①～⑤の中から選び、記号をマークせよ。解答欄は 12 。

① さらに一人いるのを見て

② すぐに一人で見に行き

③ たった一人でいるのを見て

④ 残る一人に見させて

⑤ もう一人と一緒に見て

問二　傍線部2「答へける」の主体（主語）として最適なものを次の①～⑤の中から選び、記号をマークせよ。解答欄は 13 。

① 竹流しを持っていた人
② 錆び刀を持った男
③ 負傷した武者
④ 「おあちや」という女
⑤ 城内から脱出しようとしている女中

問三　傍線部3「いづ方より来たりしやらむ」は何が「来たりし」だというのか。最適なものを次の①～⑤の中から選び、記号をマークせよ。解答欄は 14 。

① 御供の女中　② 菰　筵　③ 強　飯　④ 藤堂殿　⑤ 要光院殿

問四　傍線部4「難儀なるべし」の解釈として最適なものを次の①～⑤の中から選び、記号をマークせよ。解答欄は 15 。

① 困るだろう
② 失礼だろう
③ よくわからないだろう
④ 食べられないだろう
⑤ 不完全だろう

問五　傍線部5「わが」は誰を指すか。最適なものを次の①～⑤の中から選び、記号をマークせよ。解答欄は 16 。

① 御供の女中　② 語り手　③ 在家の主　④ 秀頼公　⑤ 要光院殿

問六　傍線部6「御迎へ」は、誰が誰を迎えたというのか。最適なものを次の①～⑤の中から選び、記号をマークせよ。解答欄は 17 。

① 家康公が要光院殿を
② 要光院殿が家康公を
③ 要光院殿が女中たちを
④ 女中たちが要光院殿を
⑤ 家康公が女中たちを

問七　傍線部7「随分よろしく申すべく候へども」の解釈として最適なものを次の①～⑤の中から選び、記号をマークせよ。解答欄は 18 。

① 立派に自害するつもりではありますが
② まあなんとかやっていけると報告いたしますが
③ うまくごまかすことにいたしますが
④ 懸命に命乞いをするつもりではありますが
⑤ 女性らしく優美に応対する予定ですが

問八　傍線部8「下知」の意味として最適なものを次の①～⑤の中から選び、記号をマークせよ。解答欄は 19 。

① 事実　② 天意　③ 法律　④ 無知　⑤ 命令